

【第1号議案】

## 令和2年度 事業報告書

令和2年4月1日～令和3年3月31日

特定非営利活動法人 ザ・ピープル

# 令和2年度 事業報告書

令和2年4月1日～令和3年3月31日

特定非営利活動法人 ザ・ピープル

## 1. 事業実施の方針および成果

令和2年度については、本会が現在置かれている社会状況を踏まえ、以下のような重点目標を掲げ、事業の推進に法人全体として取り組んできた。それぞれの目標についての実施状況と成果についてまとめる。

### (1) 古着リサイクル事業の地域内循環に向けたビジネス性の確立

コロナ禍の影響を被り、古着リサイクル基盤事業のベースが脅かされる状態が通年に亘って続いた。年度当初の段階で全国一斉の緊急事態宣言の発出により、本会の財政的な基盤を形成するチャリティショップ売上が大幅減したことから、持続化給付金の申請を行った。これにより喫緊の財政的なトラブルは回避することが出来た。しかし、年度末までコロナ禍の影響は継続したことから、年度末時点で昨年度比 79%に留まった。

東日本大震災前まで、県内に古着リサイクル活動を拡大しようと進めていた事業方針が、震災後の活動が大きく様変わりする中で、手付かずのまま置き去りの状態になっていた。その部分をセブンイレブン記念財団助成事業の中で見直し、現体制に見合う形に整理を進めた。それに伴い、福島市内からは完全に撤退するという判断を下した。

様々な手法を組み合わせた古着リサイクルの中でも、令和元年10月に発生したフジコー一関工場の火災に伴う反毛用材の搬出ストップと、コロナ禍による海外輸送費用高騰の影響は特に大きく、本会古着リサイクル活動の出口戦略の抜本的な見直しが必要となった。これについては、令和元年度台風19号の被災後、支援品の提供と仕分け手伝いボランティアの定期的派遣という形で本会活動への支援を継続してくれている(一社)日本リ・ファッション協会の仲立ちにより、新たな搬出先の開拓を行い現状の改善に道筋を見出すことが出来た。

### (2) セブンイレブン記念財団助成事業

#### フード&クロージングバンクの整備事業

●「衣」に関して古着リサイクル事業の促進と生活困窮者に対する衣料支援の体制構築

《市内に常設されている古着拠点回収ボックス改修》

古着回収ボックスは、20年を超える長期使用で使用部材の傷みがひどいことから、新規に製作しボックス設置箇所ごとの設置面積や回収量に応じたボックスサイズにして再整備することとした。今年度は、ボックスの傷みが特にひどくできるだけ早く回収ボックスの修理が必要と判断された4台について、製作、新規ボックスへの変更を実施した。

《仕分け作業のマニュアル整備》

昨年度末からの新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあり、古着リサイクル事業を取り囲む社会状況が悪化。出先を失った古着について新たな引受先を探りつつ、それに応じた仕分け作業に変更せざるを得なくなった。様々な手法を組み合わせることで、出来るだけ古着を滞らせない工夫をし、それに応じた仕分けマニュアルを作成した。

#### 《フード&クロージングバンクの周知事業開催》

回収された古着のうち、生活困窮者に対して提供することのできる衣類・生活雑貨のストック整備を計画。7月の九州豪雨災害時に、古着回収ボックスを介してタオルの回収を呼び掛け支援品として活用。実際に機能できるシステムであることを再確認した。令和3元旦福島民友新聞の社会面の記事として取り上げられるなど地域の反響は大きかった。

事業内容を広く周知するためのイベントとして、年度末の3月28日に「東日本大震災から10年 衣と食をシェアする優しい未来を目指して～ふ、ふ、ふ、ふ、フェス with 劇場版いにしえ着物ショー～」を開催。参加者数約70名。コロナ禍の中であることから大規模な集客は控え、イベント終了後のネット配信などを視野に入れた開催とした。

#### 《生活困窮者の相談窓口へのクロージングバンク案内》

フードバンク関連でつながりのある生活困窮者相談施設に対してクロージングバンク事業実施の案内状の送付。改めて衣料品提供までの流れを周知した。今年度中に依頼があった件数は182件。

### ●「食」に関してフードバンク事業の促進と生活困窮者に対する食糧支援の体制構築

#### 《常設のフードドライブが実施可能な企業・教育機関・公的機関への働きかけ》

市内で開催されるイベント会場でのフードドライブ実施協力を主催者に呼びかけることを計画していたが、コロナ禍の中、他団体主催のイベント会場でのフードドライブ実施には難しい部分が大きかった。そこで、本会主催イベントでのフードドライブ実施と、子供食堂関係者による事業PRイベント並びにいわき市主催で開催されたりサイクルフェアの中でのフードドライブを実施した。

#### 《生活困窮者支援機関向けに、フードバンクの活用に関する勉強会開催》

3月28日開催のフード&クロージングバンク立ち上げの広報イベント内でフードバンクについて学ぶセミナーを実施。来場者に理解を深めてもらうような場づくりに努めた。

### (3) 着物ストックの価値付加についての取り組み

12月12、13日にセブンイレブン記念財団助成事業の一環としてこれまで活用できていなかった着物にスポットを当てた「いにしえ着物フェア」の開催を企画。リメイク品のアイデアを含めた提案を行った。会場内ではフード&クロージングバンクPRコーナーも設け、事業の周知にも努めた。

### (4) 海外の団体とつなぐ活動の展開

JICA草の根技術協力事業として採択を受けている、ミクロネシアの非電化地域に対する技術供与支援事業(いわきおてんとSUN企業組合による技術供与)を継続実施。しかし、新型コロナウイルスの影響で渡航できない期間がほぼ1年に亘るといった状況から、JICAとの協議の下、事業期間を1年延長した上で、ミクロネシア国内での移動が許可された段階から現地補助員とリモートでつなぎながら事業運営を行うための準備を行った。

また、タイ国ナーン県の少数民族貧困家庭への奨学金供与(対象者:女子高生2名)を大学卒業後現地で就労した奨学生と共に継続実施した。

### (5) 東日本大震災後の復興支援にかかる諸事業実施

#### ● 復興庁「心の復興事業」

##### 「衣」・「食」を繋ぐ「農」を通じた交流事業

「みんなの畑」の活動に関して一般市民も対象として広く募集することを計画していた。しかし、コロナ禍の影響を考慮し、参加者を無制限に広げるのではなく、本会の会報での広報といわき市小名浜下神白団地入居者並びに永崎団地入居者を中心にチラシ配布を行う程度に留めた。

実際の栽培に関しては、いわき市を中心に浜通りエリア各地に点在するコットン畑を各農業者と共に、本事業の中で本会担当スタッフが統一的に管理する体制で進めた。しかし、梅雨時期の長雨・低温の影響が大きく、栽培全体としては例年と比較して大きく収量を下げた結果となった。また、収穫時期に関しても引き続き外部来訪者による農業体験による作業支援が得にくかった。そういった栽培状況全般に関しては、2月27日に開催されたコットンプロジェクトの栽培反省会(地球環境基金助成事業として実施)の中で数字が示され、今後どのようにして栽培を改善できるか検討が加えられた。

「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」の取り組みに関わる団体や個人を横断的につなぐ組織の形成を本事業の中で進めた。関係者を対象とするヒアリング調査などを実施した後、最終的に一般社団法人の形式を採ることとし、名称は「一般社団法人ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」(略称ふく・わた)とした。3月30日に設立。関与の形に応じて正会員・活動会員・賛助会員を設けることとした。

こうした内容は、2月27日にいわき市内外でコットン栽培に直接かかわりを持つ関係者を対象として実施した報告会の中で関係者に告げられた。これは、首都圏の関係者も参加できるよう zoom を使用したオンライン方式を取っての開催とした。この参加者は会場参加 16 名、オンライン参加者 12 名となった。

「みんなの畑」メンバーとして本プロジェクトでのコットン栽培に関わってきている原発避難者を中心に、今年度外部来訪者による農業支援が殆ど得られない状況であることから、プロジェクトに参画するほかの農家の圃場についても手伝いに入ることを計画。8月に個人的に援農隊を行いたいという申し入れがあったのを皮切りに、収穫時期に合わせて「援農隊」を結成して正式なものとしては3回にわたって収穫作業の手伝いを行った。

「みんなの畑」の活動と同時に、有機農法で野菜を栽培する「みんなの畑菜園」の参加呼びかけを実施。皆で有機農業と野菜の収穫を楽しんだ。

更に、収穫された野菜の提供を、フードバンク事業との関連から地域内のコミュニティ食堂で実施することを計画。いわき市平 14 区公民館を会場として NPO 法人協創のまちサポートが運営するコミュニティ食堂に対して、夏野菜の収穫時期である 9 月 2 日カボチャなどを提供した。

冬野菜の収穫時期である 12 月にも郷土料理の提供を再度企画。12 月 1 日に実施した。この提供にあたっては、事前にこれまでも台風 19 号の被災時に本会の炊き出しの事業を手伝った経験もある大熊町からの避難者の女性たちが担当。二人で早朝からすいとんなどを調理して、40 食ほどを提供した。寒い時期の温かい汁物を中心とした食の提供ということで、コミュニティ食堂に集まった方々からは大いに歓迎された。

また、本事業の中でつながりのできたいわき市久ノ浜の津波被災エリアで営業している「はま水」の店頭で、有機野菜の販売をしてみてもいいとの言葉を頂き、収穫した大根のうち数本を委託。1800 円の売り上げとなった。

## ● 地球環境基金助成事業

### 福島から次世代へ！ 国外へ！ オーガニックコットンで想いをつなげるプロジェクト

コロナ禍の中、限られた条件下ではあったが、東日本国際大学の学生とのコラボレーションによりオーガニックコットン栽培を通じた世代間、地域間交流事業が進められた。その教訓を通して、本プロジェクトが震災後の地域課題解決のために機能してきた部分について、大学生が自らの言葉で高校生たちや同年代の学生たちに語ることも行われ、意義深いものがあった。具体的な成果としては以下の点があげられる。

#### ▶ 本事業を通してコットン栽培の現場で活動した大学生の数

コロナ禍と天候の影響により、実際の栽培への参画の動き出しは 7 月からになってしまったが、通年で 4 回(7/19・8/7・10/18・12/6)農作業を実施。延べ人数 65 名の参加が得られた。他にもいわき市内の高校生 40 名がコットン農作業体験(11/28)を行うなどして、100 名を超える若い世代にコットン栽培を通じた私たちのメッセージを伝えることが出来た。

▶大学生が同世代やより若い世代に対して独自の企画で農業体験の場を持つ

東日本国際大学生が学内ライオンズクラブの活動と連動して、系列校である昌平高校の生徒に対してコットン栽培現場への来訪についての働きかけを行い、夏休み期間中の8/7に農作業体験活動を実施。結果として12名の高校生がコットン栽培に加わった。

▶大学生の企画で「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」の社会的意義を伝える場を生み出す

夏休み中の高校生に対する農業体験の際や、10/25の開催された東日本国際大学の学園祭の中での活動紹介ブースの設置など、自分たちの活動を通して本プロジェクトの意義を同世代の若者たちに伝える場づくりを、大学生自身の手で行うことが出来た。。更に、8/27にはネパールの女性たちに対してオンラインでの説明を留学生自身の手で行い、チトワン市在住の女性たち5名に対して本プロジェクトの取り組み内容やその意義を解説した。

▶福島県浜通りエリアにあたるいわき市及び双葉郡内でのコットン栽培の継続

今年度「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」に参画して進められたコットン栽培は、いわき市内(小名浜神白・小名浜野田・泉町中ノ坪・遠野町・小川町・平平窪・四倉町柳生)7ヶ所、広野町1ヶ所、楢葉町1ヶ所、富岡町3ヶ所、南相馬市1ヶ所の合計13ヶ所。目標値をクリアすることが出来た。但し、その栽培状況は夏前の長雨と低温が災いして大きく収量を下げた結果となり、多くの課題を残した。

▶大学生とのコラボでコットンの利活用アイデアコンテストへの応募

東日本国際大学学園祭の活動紹介ブースを活用して、オーガニックコットン商品アイデアコンテストを実施。当日は本会栽培スタッフ1名がアドバイザーとして同席していたが、展示並びにコンテストの作品募集関係の一切を学生サイドで実施。コロナ禍の影響で学内発表のみとなったため、学外への広報力はさほど大きくなかったが、最終的に36点のアイデアを集めることが出来た。その中から、一般審査と専門家の審査を経て、最優秀賞として1点優秀賞として2点の作品が選ばれ、賞状と副賞の授与が行われた。

▶草木染め教室への参加

体験教室の講師には、三重県で染色工房を運営する染色家の岡博美氏を招聘。以前からコットン栽培でつながりのある南相馬市の草木染め愛好グループ「ジャパンプルー柚木」とのコラボレーションで企画を進め、大学生3名のほかに、いわき市内から11名、南相馬市内から8名、合計22名の参加があった。

▶「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」報告会(オンラインも含む)に30名以上の参加

コロナ禍の影響が大きく、首都圏での「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」報告会を開催することは難しかったことから、完全オンラインでの開催に切り替えて、6/13に実施。本会事務所を配信基地としながらも、いわき市内及び双葉郡内のコットン畑も可能な限り中継で結びながら、出来るだけ臨場感を味わえるような形での会運営を心掛けた。参加者数は関係者を含めて74名。目標値を大きく上回った。遠くは宮崎県からの参加もあった。更に、1年間の栽培が終了した年度末近くの2月27日には、今年度の栽培状況について報告する機会を設け、地域農業者と首都圏で栽培に直接関わっているメンバーがオンライン上ではあるが栽培状況を確認し合う場とした。こちらには現地16名、オンライン12名の参加があった。

▶留学生の企画したネパールでの報告会

コロナ禍の影響で、ネパールへの渡航はおろかネパール国内の移動制限、国際郵便の取り扱い停止といった状況が続き、年度当初に予定していた事業内容は大きく変更せざるを得なかった。ネパールでの報告会は、前年度ネパールからの留学生が自宅に届けていた綿繰り機・チャルカなどのセットを活用する形にして、8/27に実施。現地で5名の女性の参加を得ることが出来た。この中で、先ず本プロジェクトの事業概要と意義を説明。

▶チャルカの使用方法をネパールの女性に伝える

現場に届けてあった綿繰り機・ハンドカーダー・綿弓・チャルカを使用して、糸を紡ぐための一連の作業の流れを説明。参加者が現地で実際に糸を紡ぐまで指導を行った。参加者数は5名であった。

## (6) 台風 19 号被災者支援事業の継続

コロナ禍の影響から具体的なサロン活動は実施できなかったが、コロナ禍の中で災害に見舞われた時にどのような点に気を付けて支援活動を行うべきであるかを学ぶ研修会の開催を企画。いわき市まち未来創造支援事業の助成並びにいわき市の委託事業として実施した。その流れの中から、災害支援ネットワークいわきが立ち上がり、大きな成果となった。まち未来創造支援事業の中では、研修会のほかにも生活困窮者支援のフードバンク事業との組み合わせで、食糧支援時に手作りマスクを提供する取り組みも行い、仲介役を担う相談窓口の担当者からも大いに歓迎された。

## (7) WAM助成事業・パルシステム連合会地域づくり基金助成事業

### 安心していわきで暮らすためのフードバンク拡充事業

#### ●WAM助成事業

「フードバンクいわき」の活動を通して、生活困窮に陥った際に相談を持ち掛けることになる各種の相談窓口を介して、フードドライブによって家庭等で眠っていた食品回収により確保した食品等を一時的な食糧支援（一部生活雑貨の支援を含む）として提供する。その食品を受け取ることで、生活困窮者が次の生活再建に向けたプロセスを組み立てるまでの時間的な猶予を生み出すことが出来るようにする。

#### 《フードドライブの実施》

コロナ禍の中、今年度において小規模な形ではあるが 7 回「フードドライブ」を実施する事が出来た。またコミュニティ食堂へ食材提供、コロナ禍で苦勞している学生（大学・専門学校）に食品提供を実施した。

#### 《フードバンク活動継続・生活困窮者の相談窓口とのフードバンク連携》

フードバンク関連でつながりのある生活困窮者相談窓口との連携は今まで以上に強化され、現在は 35 か所となっている。フードバンク事業の促進と生活困窮者に対する食糧支援の体制構築を今後も継続する。

#### 《フードバンクを学ぶための勉強会開催》

フードバンクについて学ぶ勉強会、研修を実施し、スタッフ及び関係（連携）機関の強化に挑めた。

#### 《フードバンク活動報告の冊子完成》

年間通したフードバンク活動について詳しくまとめた冊子（30P）を作製した。今後のフードバンク活動の広報として大いに活用出来る。

#### ●パルシステム連合会地域づくり基金助成事業

本会の活動の根幹をなしている「古着リサイクル事業」と東日本大震災後から始動した、農業と人のつながりの再生を目指す「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」諸事業を組み合わせながら地域課題に向き合う為、活動に必要な、移動車両「軽トラック」を購入する事で、1 年間活動をスムーズに実施する事を目的とする為、事業に必要な軽トラックを購入。それにより、古着リサイクルにおいては衣類の出し運び、整理移動、古着回収サポート等々、大いに活用する事が出来た。コットンプロジェクトに関しても、作業スタッフの各畑への移動、農機具・機材・肥料等の出し運び、整理移動等々、古着リサイクル同様、大いに活用する事が出来た。古着リサイクルにおいては台風 19 号で被災をした地域にも古着回収のニーズが上がる事もあり、軽トラックで回収に行き活用する事が出来た。一方で畑などの地盤があまり良くない土地でも軽トラックで農機具等を運ぶことが出来、スタッフの安心度も保つ事が出来た。

## (8) 組織の世代交代促進事業

世代交代後のスタッフの人材育成を目的として、月例ミーティングの事務局長主導での開催に方針を転換。次年度から実施できる体制づくりが進んだ。

## (9) その他

## 2. 事業の実施に関する事項

### (1) 特定非営利活動に関する事業

定款の事業名	事業内容	(A)実施日時 (B)実施場所 (C)従事者の人数	(D)受益対象者の範囲 (E)人数	支出額 (円)
古着リサイクル関連事業	市内外から家庭で不要となった古着を回収。仕分け等リサイクルの基盤となる事業を継続実施した。	(A)常時 (B)いわき市内各リサイクルボックス いわき市小名浜志賀倉庫・諏訪倉庫 (C)9名×20日×12月	(D)一般市民ならびに全国の賛同者 (E)不特定	6,298,134
	エコウルリサイクルはコロナの影響及び工場火災により活動休止。 リメイク品の製作を常設店舗に併設した工房2ヶ所で実施しアップサイクルに努めた。 反毛製品化事業に関しては不定期で実施した。	(A)発送準備：休止 反毛加工：不定期 リメイク：常時 (B)いわき市内小名浜ファイバーリサイクル倉庫・志賀倉庫・工房ぴ〜ぶる(PCC大原店内・君ヶ塚店内) (C)発送：6名×24回 反毛：1名×5回 リメイク：3名×15日×12月	(D)一般市民ならびに全国の賛同者 (E)不特定	3,079,764
	常設・臨時バザーを出店し、古着を地域内でリユース活用する機会を身近なものとする事業を展開した。	(A)店舗は常時 お下がりバザーは9月9日に実施。 着物フェア月日に実施。 (B)各店舗・パルシステムみんなの交流館・いわきららみゆうイベント会場 (C)各バザー30名	(D)一般市民 (E)不特定	6,946,131
在宅障がい者自立支援事業	障がい者の施設にウエス材を提供した。 不就労の若者にジョブトレーニングの機会を提供した。	(A)常時 (B)いわき市内小名浜志賀倉庫・市内外での綿花栽培地等 (C)14名	(D)いわき市内障がい者関連施設・いわき若者サポートステーション利用者 (E)25名	208,500

海外生活支援・海外教育支援事業	ミクロネシア支援事業の事前調査を行う準備に入った。奨学金については、前年度供与経費で事業実施した。	(A)不定期 (B)JICA 東北・タイ国ナーン県・ミクロネシアチューク州 (C)2名	(D) タイ国少数民族・ミクロネシア離島女性グループ (E)22名	2,015,693
情報発信事業	会報の発行とHP管理により活動情報を広く一般市民に提供した。	(A)会報：年4回発行 HP及びフェイスブック更新を定期実行 (B)事務局・各PC (C)会報：1名 HP及びフェイスブック：2名	(D)一般市民・首都圏民 (E)不特定	53,459
ワークショップ・講演会・市民啓発事業	リサイクルを進める手法として布ぞうり教室を開催した。	(A)布ぞうり教室：8月21日・11月6日・令和3年3月11日 (B)布ぞうり教室：クリンピーの家 (C)各8名参加 計24名	(D)一般市民 (E)不特定	20,000
ボランティア活動体験・研修受入れ事業	中高生ボランティア体験受入れを「いわきアカデミア事業いわき発見ゼミ」の一環として行った。	(A)11月29日 (B)上神白コットン畑・小名浜まちづくりステーション (C)5名	(D)磐城高校生徒 (E)40名	998,198
関係団体との交流・連携・協力事業	いわき市民間国際交流・協力団体連絡会事務局として地球市民フェスティバルの運営を行った。	(A)常時 (B)事務局 (C)2名	(D)いわき市内国際交流・協力関係団体 (E)10団体	219,355
被災者支援に関する事業	東日本大震災救援・復興支援の事業として、小名浜ボランティアセンターを運営。そこを拠点として、諸事業を実施した。⇒第一次産業の活性化に関する事業・生活困窮者支援事業として記載	(A)常時 (B)事務局・小名浜ボランティアセンター (C)専門スタッフ2名・ボランティア4名	(D)東日本大震災被災者並びに地域住民・首都圏からの視察客 (E)不特定	896,987



第一次産業の活性化に関する事業	ふくしまオーガニックコットンプロジェクト関連事業として、企業協賛を受けながら事業展開を進めた。復興庁・地球環境基金・フィランソロピーによる助成事業も進めた。	(A)常時 (B)事務局・市内外での綿花栽培地等 (C)専門スタッフ 3名・ボランティア等 30名	(D)市内農業従事者・原発関連の避難者・首都圏からのボランティア希望者 (E)不特定	7,960,626
生活困窮者支援事業	フードバンクいわきの運営業務をセブン-イレブン事業・WAM助成事業・パルシステム連合会地域づくり基金助成事業として実施した。	(A)常時 (B)事務局・小名浜ボランティアセンター (C)専門スタッフ 4名・補助アルバイト 1名	(D)東日本大震災被災者並びに地域住民のうち急を要する生活困窮者 (E)不特定	8,893,583
その他の事業	本会活動推進のために必要な事業			0
合計				37,590,430

(2) その他の事業

定款の事業名	事業内容	(A)実施日時 (B)実施場所 (C)従事者の人数	(D)受益対象者の範囲 (E)人数	支出額 (円)
会員研修会・研修旅行の開催	研修会は実施しなかった。	(A) (B) (C)	(D) (E)	0